

月刊

GPP



Vol.47

令和元年9月号

株式会社
グロースパートナーズ

SATREPS事業 エチオピアMNGD(マンガード)

今年は長雨の梅雨の後に猛暑が続いたため、産地で有名な妻の実家エリアの梨たちも形が不揃いである。うれしいことに味は全く問題なく、瑞々しくて美味しい。

さて、6月号でお伝えしたエチオピアで繰り広げられているMNGDプロジェクト、いよいよ具体的に動き出したようだ。

先日は、京都大学・澤村先生、愛媛大学・安原先生及び宮崎大学・亀井先生と共に、セルドロン製造機メーカーの香川県・大矢根利器製作所を訪問した。

現状設備の機構説明をしたところ、エチオピアのインフラ事情を考慮されて、製造機の作動を電気に頼れないことが明白になり、亀井先生は頭を抱えておられた。

元々、京都大学・木村先生は「牛に臼を挽かせますか!？」とおっしゃっておられたが、あながち桁外れな話ではなく、「水車を利用してはどうか」「植物残渣からエタノールを生成してエンジンを動力とするのはどうか」等々、活発な意見交換が出来た。こういう話はとても楽しい。

原材料は当然、古紙ではない。十分な古紙がエチオピアで集められるはずなどない。紙は木から出来ている、正確には木からセルロースを取り出して紙を製造している。木はセルロースを守る接着剤の役目としてヘミセルロースやリグニンが成分構成されているが、これらは逆に水分をはじく特性を持っている。太陽に晒され、雨露を凌いで立ち続ける木には絶対に必要不可欠だからだ。MNGDプロジェクトでは古紙以外の原材料を現地で調達することも大きなテーマとなっているが、どうやら“あたり”は付いたらしい。セルドロンと同等の吸水力を持つ必要はなく、給水能力は若干劣っても添加量を増やすことで同等の効果が得られることが実現出来れば、それはエチオピアをはじめとしたサブ・サハラは勿論のこと、まだまだ開発が進んでいる中国、東南アジアでも有効な原材料となり得るであろうと、心より期待している。

2020年の年明け直ぐには、日本からセルドロンを持ち込んで100メートル程度の軟弱道路を改修工事する予定とのこと。現地の土質はブラックコットンソイルと言って、日照りの時はカチンコチンで、ひとたび雨が降るとグチョグチョが長らく続く厄介者らしい。

セルドロンはきっと彼らに打ち勝ってくれることであろう。

残余生コン、工場排出物、アスベスト除去工事残渣、下水場スラッジ、浚渫土の処理剤として、セルドロンの可能性が徐々に具体化している。また、遠くエチオピアでは地域の人や車の往來のサポートをする事業が進みだした。セルドロンはまだまだこれからである。

藤井 成厚

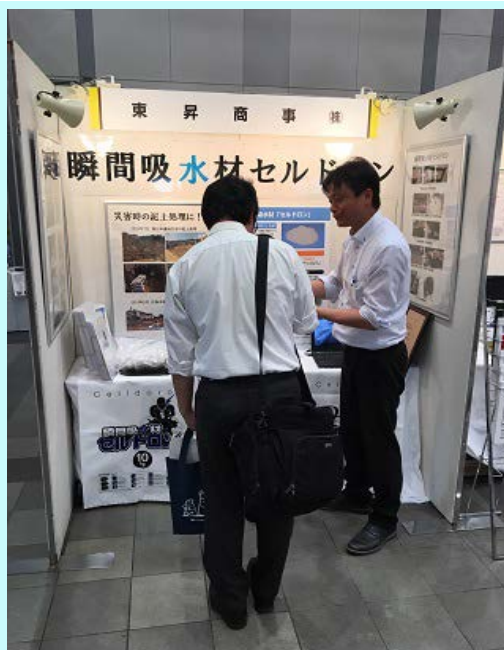
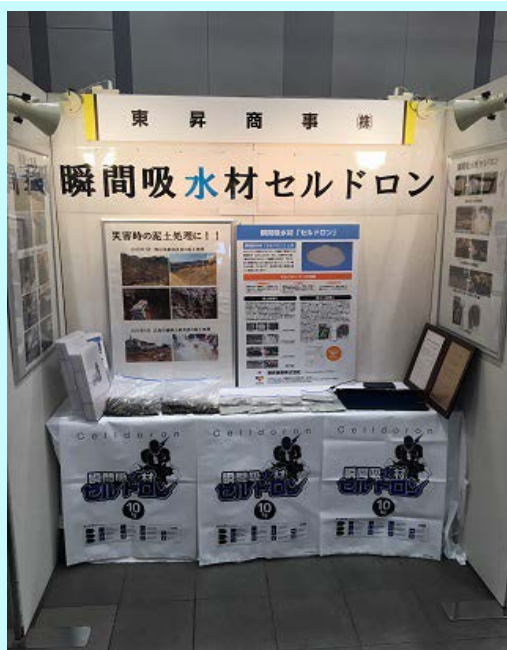
全地連技術フォーラム2019に出展

四国でセルドロン販売を実施していただいている東昇商事株式会社様が「全地連技術フォーラム2019」に、地質業界への啓蒙活動のためセルドロン体験ブースを準備していただきました。地質業界のコンサルタントや作業会社、新聞社などに体験いただき、セルドロンの効果と可能性を紹介させていただきました。

地質調査を実施する際は、水を使ってボーリングするため、スライムと呼ばれている泥水が発生するようです。このスライムは、本来は、バキューム車を頼んで処理するようですが、少量の場合などは、現場に垂れ流して帰ってしまう業者もあるようです。

セルドロンを利用することで、現場で簡単に土嚢袋にいれられることができるようになるため、トラックに積載可能なスライムになります。地質調査業界でも、泥水の処理に困っております。

ぜひセルドロンをお試しください。



GNN勉強会へ出席

今回セルドロンの発表や展示はなかったのですが、久しぶりに参加させていただきました。最近お会いできてなかった方も多く参加されており、とても賑やかに行われておりました。今回のテーマは、「GNNとSDGs」GNNは、「持続可能な開発目標(SDGs)」に積極的に取り組んでいくようです。様々な技術革新で持続可能な社会構築を実施するために、皆様に意識するよう呼び掛けておりました。

基調講演では、GROOVEX株式会社の代表取締役林様が家族型ロボットLAVOTの開発についてなどお話されておりました。日本人は、高度経済成長期には、多くの新しい技術を生み出していたのに、今は、作業効率をあげることがメインになっており、失敗しないことを意識するため、新しい技術が生まれにくい社会になっているそうです。少しのチャレンジ(小さな失敗)をたくさん経験することによって新しい技術が生まれやすいようです。少しのチャレンジを続けられるように頑張ってください。



その他ご不明な点がございましたらお気軽にご連絡ください。